

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



京北での自然と親しむ会の帰途立ち寄った美山町。日本の秋の風景を堪能した。(自然と親しむ会報告は2ページ)

Contents

- 年末カンパのお願い P 3
- 鉛が中国の子どもをおびやかす P 4
- 関東ブランチから P 5
- 黄土高原ワーキングセミナー参加報告 P 6

2005.11

106

GEN 学習会 土・水・木から見た中国の環境問題 報告

深刻な中国の水問題

10月7日、大阪市立総合生涯学習センターで開かれた学習会「土・水・木から見た中国の環境問題」には30人の参加がありました。GENの高見事務局長が内陸の農村で活動しているからこそわかる中国の環境問題・水問題の深刻さをうたえました。

土・水・木のうち、もっとも深刻なのは水です。大同の都市部では1日にわずか20分の時間給水。農村部の井戸や泉は次々に涸れ、地下水は2008年には枯渇するという新聞報道も。水がないとなれば、考えるのは汚排水の再

利用です。大同にも大規模な污水浄化設備ができました。浄化された水は中水につかわれ、河に流されるはずですが、桑干河などの大同の河には流れはほとんどなく、臭気をはなつ水がほんの少しよどんでいるだけ。

環境林センターの土壤浄化槽は、今年の出番がありませんでした。炭鉱住宅の生活汚排水を浄化してセンターの灌漑用水にするための施設ですが、その汚排水がなかったのです。センター周辺では、毎日のように農民が水をめぐって争っていたそうです。黒く濁っ

て臭気のひどい汚水ですよ。どこに消えてしまったのでしょうか。

さらに、資源需要の増大で、小規模な鉄や石灰の鉱山が多数開かれています。鉱石を洗った水は垂れ流し。その水が流れ込む河は、いずれ北京の水源になることになっています。

10月28、29日には日中水フォーラム2005札幌が開催され、高見事務局長も参加しました。大同で水フォーラムを開いたら、などという話がでたようですが、北京なら「節水しよう」と呼びかけもできたけど、大同では節水しようにもその水がありません。そして、中国の水問題は、中国から大量の農産物や工業製品を輸入している日本にも、もちろん他人事ではないのです。(東川)

GEN 自然と親しむ会

京都の奥座敷一京北で 1 泊の自然観察会報告

勝部 美帆 (GEN 会員)

10月15、16日、京都市京北の京都府立ゼミナールハウスで自然と親しむ会をおこないました。14人が参加し、のどかな京北の集落をいろいろ植物を立花代表の説明で楽しみました。

GENの会報でこのお知らせを見てすぐに申し込みました。しかし、4年前に1度GENのツアーに参加して以来、会員として会報を読むこと以外ほろくに活動をしてこなかった私。誰が参加されるのかもわからぬまま、若干の不安を感じつつ当日を迎えました。

日程は10月15、16日の2日間。1日目は朝からあいにくの雨。しかも現地へ近づくほどに雨は強くなる一方で、聞けば今回の講師の先生は雨を呼び込む強力なパワーを持つと有名な方とのこと。でも、雨だからといって予定が変更される気配もなく、実際、自然観察の時間だけは雨が小雨に!!!



4年間もGENの会員でいながら立花先生と初対面なのは私ぐらいかもしれませんが、立花先生の観察会での行動力・授業の中での情熱や説得力(脱線力とは恐ろしくて書けません)……とにかくいろんなことに圧倒されればなしの2日間でした。知ろうとする意欲がありさえすれば誰でも平等に受け入れてくれる、生徒であることの居心地のよさを久しぶりに実感しました。

それと同時に、たくさんの知識を身につけないと、正しく緑化活動について考えることは不可能なんだと、その難しさを感じとった2日間でした。

京北は本当に美しい集落で、のんびりと楽しく過ごすことができました。

また私のように普段は会費を納入する協力しかしていなくても、なんの違和感もなく楽しく過ごすことができました。参加者のみなさん、ありがとうございました。

訂正とお詫び

『緑の地球』105号2ページ「おおさか『山の日』」の記事に間違いがありました。お詫びして訂正します。

左欄11行目 誤 90.02.15 → 正 92.02.15

中欄5行目 誤 600人 → 正 800人

毎日国際交流賞授賞式

9月22日、毎日新聞大阪本社オーバルホールで、第17回毎日国際交流賞授賞式と受賞記念講演会が開かれました。GENの関係者も50人近く来場しました。

団体で受賞した緑の地球ネットワークの立花吉茂代表の講演は、黄土高原でのGENの緑化協力にとどまらず、世界の森林破壊についても語るなど、はばひろい内容でした。個人で受賞したルダシングワ(吉田)真美さんは、ルワンダでの義肢製作など障害者支援活動について語りました。

本の紹介

『環境要覧2005 / 2006』

財団法人地球・人間環境フォーラム発行 / 古今書院 / 3,200円(税別)

環境問題およびそれに関連する内外の主要な統計データや資料をコンパクトにまとめた1冊。環境問題をさまざまな角度から理解するための基礎資料として利用されることを目的としています。京都議定書発効をうけ、地球温暖化関連データを豊富に収録。

お知らせ

朝日新聞の「オピニオン」面に、11月21日から「高見邦雄の中国・黄土高原の村から」が連載されます。ぜひご覧ください。



年末カンパのお願い

いっそうのご支援を！

緑の地球ネットワークが活動を開始してまもなく14年になります。この間、会員（現在個人616、団体28）をはじめ、広範なみなさんに支えていただき、心から感謝いたします。

中国大同市での緑化協力活動は、今年春までに4,600haに1,650万本の植林を達成しました。近年は中国側スタッフ・技術者、日本からの専門家等の協力により、技術も高い水準に達し、各方面の評価を受けています。環境林センター、植物園、苗圃、カササギの森等の施設も充実してきましたが、維持していくには毎年一定の経費を必要とします。また、緑化は苗木を植えたあとの管理が重要で、成果をあげるまでには年数と経費を必要とします。

おかげさまで、みなさんからの会費、カンパ、助成金等でこれまでネットワークの仕事は支障なく実施できてきましたが、ここ数年は残念ながら赤字決算

となっています。今年度はこのようなことがないよう、募金に力を入れています。

会員になっていただく、カンパに協力いただく等、緑の地球ネットワークの活動に一層のご理解とご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

“カササギの森”へのご寄付も、ひきつづき受け付け中です。敷地内の植樹可能などころはかなりの部分が植え終わり、そろそろ目処がついてきました。日本でも大同でも、第2の“カササギの森”をのぞむ声がつよいので、候補地を探して新たに実験林場を設ける予定です。さらなるご支援をお願いいたします。

* * * * *

緑の地球ネットワークは国税庁により、今年6月1日から2年間、認定NPO法人の認定を受けました。認定基準のハードルは高く、認定NPO法

人ははまだ37団体にすぎません。認定NPO法人になったことで、緑の地球ネットワークにご寄付いただくと税制上の優遇をうけられます。

個人からのご寄付のうち1万円以上の部分について、確定申告の際寄付金控除が適用されます。

法人からのご寄付は一定の限度内で損金算入が認められます。

財産相続または遺贈により取得した財産を申告期限までに寄付した場合は、一部の場合を除き、その寄付金には課税されません。

緑の地球ネットワークの場合、寄付金とは、緑化基金、運営カンパ、カササギの森協力金等と会費の1口をこえる部分、賛助会費の12,000円をこえる部分です。

ご寄付・助成

●富士ゼロックス端数倶楽部／富士ゼロックス株式会社

富士ゼロックス端数倶楽部と富士ゼロックス株式会社から各10万円ずつのご寄付の申し入れをいただきました。ありがとうございます。

富士ゼロックス端数倶楽部は、その趣旨に賛同する社員の毎月の給料と賞与の端数に個人の自由な意志による金額を加えて継続的に拠出し、会員が必要と考える分野・テーマでその資金を役立てるものです。外部に寄付する場合には、会社から同額がマッチング・ギフトされます。

緑の地球ネットワークには1995年以来毎年ご協力をいただき、今年まで11年間のご寄付は総額410万円となります。端数倶楽部、会員のみならず、みなさん、富士ゼロックス株式会社に心から感謝いたします。

●国土緑化推進機構・緑の募金

育苗センターの整備と運営のために200万円の助成が決まりました。

●日中緑化交流基金

黄土高原における緑化事業に対して950万円の助成が決まりました。

GREENなんでも勉強会

シベリアのタイガを訪ねて

2004年7月、小川さんは中央シベリア高原の永久凍土地帯のタイガを訪れました。落葉広葉樹林、凍土の様子、凍結したマンモスなどをたくさんの写真を見ながら報告していただきます。GENの協力地、中国山西省大同市のはるか北にひろがるタイガ地帯の自然について、興味深いお話を聞けることでしょう。

●講師：小川房人さん（大阪市立大学 名誉教授、植物生態学）

●日時：11月25日（金）18時30分～20時30分

●会場：弁天町市民学習センター第2研修室（JR大阪環状線、地下鉄中央線「弁天町」下車、オーク200 7階）

●参加費：700円

GEN自然と親しむ会

樹形と冬芽の観察会

1年でもっとも寒い1月下旬、落葉樹はすっかり葉を落として、樹形をくっきりと見せてくれます。春の準備の冬芽も見られます。寒い時期の植物の様子を観察してみましょう。

●日時：2006年1月29日（日）午前10時30分～午後2時半頃まで

●場所：大阪府立花の文化園（河内長野市高向2292-1 TEL.0721-63-8739 南海高野線または近鉄長野線「河内長野」駅からバス10分）

●講師：前中久行さん（大阪府立大学教授・緑地植物学）

●集合：午前10時30分に花の文化園入口

●参加費：一般500円、中学生以下200円（保険料を含む、入場料別）

●定員：30名

●申し込み：1月25日（水）までに緑の地球ネットワークまで。

※小雨実施。昼食は弁天持参または園内にレストランもあります。

雲南見たい聞きたい

鉛が中国の子どもをおびやかす

茂田井 円 (GEN 関東プランチ)

◆繊維質を多く摂っても…

昨年10月、娘の通っていた幼稚園をはじめ、雲南省昆明市のあらゆる幼稚園で突然「鉛中毒の講習会」が開かれた。親たちは耳慣れない言葉に驚いて駆けつけた。会の主旨は「昆明で鉛中毒の子どもが増えている、子どもたちは鉛中毒の被害を大人以上に受けやすいので注意するように」というものだった。注意といっても食べ物と遊ぶ場所への配慮程度で、原因の説明は一切ない。保護者が質問をしても「繊維質を多く摂ってください。ただし子どもは大人より栄養分、とくに脂肪の吸収率がいいので繊維質をとっても簡単には排出されません」との答えしかかえってこない。子をもつ親は途方にくれるしかなかった。

数日後、街角で鉛中毒のポスターを見かけた。そこには脳神経系に障害



中国の子どもたちを鉛がむしばみつつある？

をもたすために起こる症状の説明はあっても対策は書かれていなかった。やがて「これで鉛中毒を防げる」といった怪しげな薬の広告が目につき始めた。

10月下旬には、雲南省で学力トップの師範大付属小学校生4,104名に対して血中鉛の検査を行ったところ、46.76%が正常値を超えていて、なかには237 $\mu\text{g}/\ell$ という高い濃度の人もいたとの新聞報道があった。「雲南省では14歳以下の児童の約30%がなんらかの鉛中毒との観測があるので、児童は検査を受けてほしい」（雲南情報報）と呼びかけていた。また今年3月に行われた全国政協十届三次会議という、全国の識者が国の問題を議論しあう会議でも鉛中毒が議題に上がっていた。ここでは北京市で、少なくとも3分の1以上の児童が鉛中毒に侵されており、工業都市の重慶市では85%以上に達していると報告された。

ちなみに中国での血中鉛の正常上限値は99 $\mu\text{g}/\ell$ で、日本の上限値は40 $\mu\text{g}/\text{dl}$ (1 ℓ は10 dl)。なんと中国と日本では上限値に20倍以上の開きがある。日本の値で考えると中国での鉛中毒の比率は、より深刻になる。

◆中央分離帯でチャンバラごっこ

この鉛中毒の原因は公表されていない



昆明でも朝夕の渋滞はひどい。

いが、日本でも高度成長期の1970年代には各地で鉛汚染が問題となった。その原因の一つは自動車用ガソリンに含まれる鉛。東京都立衛生研究所の報告によれば1975年にレギュラーガソリンが無鉛化されて以降は、調査対象の都内での血中鉛濃度は劇的に減少したそうだ。

現在中国では無鉛ガソリンが義務付けられているが、新聞には時折、無鉛と称した有鉛ガソリンが売られていたという取締りの記事が掲載されていた。

昆明も車社会に突入し、朝夕の渋滞がひどい話を前に書いたが、そんな中、昆明の子どもたちは、6車線道路の中央分離帯の緑地ででんぐり返しやチャンバラごっこに興じていた。コンクリートばかりで地面がほとんどないため、そんな場所でも貴重な遊び場となってしまうのだ。その無警戒さも鉛中毒をひどくさせているのだろう。原因が公表されなければ、警戒のしようもない。娘に接してくれた、優しく素直な子どもたちを思うにつけ、早急な対策が期待される。

ゆのり この人

小西ゆみ子さん (大阪市)

こんにちは。GEN事務所から自転車です。5分ぐらいの所に住んでいる会員です。いつかワーキングツアーに参加することを夢みながら、会費やテレカ協力を細々と続けてきました。はじめの頃のビデオは「森よ、よみがえれ」でしたが、10年後には「よみがえる森」と、長い目で見れば着実に進んでいることを感じます。その一端に自分もつなが

ていると思うと、元気づけられます。

他にも微力ながら、福祉作業所のバザーを応援したり、戦争はいやだという集会に行ったりしています。最近、大阪港のそばの天保山公園で「中国人強制連行追悼記念碑」除幕式があったので、紹介します。太平洋戦争末期、大阪港付近にも1,000人以上の中国人が連行され、過酷な労働や虐待によって、1年足らずのうちに86人も亡くなられたそうです。その犠牲者を追悼する碑がない(動物を追悼する「獣魂碑」はあるのに!!)と気づいた人びとが、大阪市への働きかけや募金活動などをし、7年がかりで完成しました。私は、

除幕式当日の朝の新聞で初めて知り、生存者や遺族の方も来られるので地元住民が行かねばと駆けつけました。

碑文の「彰往察来」は、「過去をあきらかにすることによってこそ、正しく未来を察することができる」という二千年前の中国の易経にあることばからとったそうです。日本が中国に何をしたのか、できるだけ知っていきながら、友好交流したいなと思います。





GEN 関東ブランチから

9月例会報告

中村 英 (記者)



9月10日、GEN 関東ブランチ月例会が立教大学でありました。

夏の黄土高原ワーキングツアーの報告をしてほしいということで、ツアー参加者としては静岡県から藤原國雄さん、田平強さん、山村恵美さん、東京から浅野千明さん、板垣孝子さん、中村未来さん、中村英の7人が参加、最初の「ツアー同窓会」となりました。関東ブランチで参加者がこんなに集まったのは初めてだそうです。

石原務さんから送っていただいたツアービデオをみんなで鑑賞し、田平さん・山村さんが撮影した写真を藤原さんがプロジェクターをつかって表示して、みんながいろいろ説明をしました。

最後に藤原さんから5年間のツアー体験をまとめた、2000年からのカササギの森と采涼山プロジェクトの変遷を写真を交えて説明してもらいました。何も生えていなかった采涼山が変化していく有様はすばらしく、佐々木さん、岡垣さん、藤原さんの3人が現地でご感慨深そうに記念写真を撮ってもらっていた気持ちが、少し理解できました。例会参加者には、春のワーキングツアー

に参加された方もいて、夏はずいぶん緑が多いのねと驚かされていました。

2時間あげますからどうぞということでしたが、2時間を上回ってしまい、あとの議題が押せ押せで、時間を主催者に気にさせてしまってすみませんでした。例会終了後は、恒例の二次会で楽しい時を過ごしました。

石原さんのビデオを見て、「このビデオいいわね、10月のグローバルフェス

グローバルフェスタに参加して

阿部 大二郎 (大学生)

10月1日、2日に開催されたグローバルフェスタ Japan 2005 に両日参加しました。会場の日比谷公園は、週末ということもあり、来場者で溢れていました。僕は、テント設営の途中から参加し、徐々にヒートアップする会場を感じました。

開場されてからは、GENのPRをしました。僕は今夏の黄土高原ワーキングツアーに参加していたので、中国の現場の雰囲気が記憶に新しく、また『ぼくらの村にアンズが実った』を読んでいたこともあり、来場者に熱意をつたえることができました。

今回はサブテーマとして、「☆「知る」から「行動する」へ☆～ミレニアム開発目標への挑戦～」と設けられていました。ミレニアム開発目標(MDGs)は8つの項目で構成されています。①極度の貧困及び飢餓の撲滅、②普遍的初等教育の達成、③男女平等及び女性の地位強化の推進、④幼児死亡率の削減、⑤妊産婦の健康の改善、⑥HIV /

エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延の防止、⑦環境の持続可能性の確保、⑧開発のためのグローバルなパートナーシップの推進、です。

GENが直接関わってくるのは、①、⑦あたりでしょうか？僕はマクロ的な視点のMDGsよりも、一市民的、ミクロ的な「知る」から「行動する」の方が重要だと思います。MDGsが重要ではないというわけではなく、環境問題は1人1人の意識、行動に委ねられていると思うからです。NGOやNPOを通して環境問題に取り組むことも重要ですが、もっと身近なことからも始められると思います。

例えば、僕はマイ箸とマイタンブラーを持ち歩く生活を始めました。皆さんもできることから始めてみませんか？



エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延の防止、⑦環境の持続可能性の確保、⑧開発のためのグローバルなパートナーシップの推進、です。

GENが直接関わってくるのは、①、⑦あたりでしょうか？僕はマクロ的な視点のMDGsよりも、一市民的、ミクロ的な「知る」から「行動する」の方が重要だと思います。MDGsが重要ではないというわけではなく、環境問題は1人1人の意識、行動に委ねられていると思うからです。NGOやNPOを通して環境問題に取り組むことも重要ですが、もっと身近なことからも始められると思います。

例えば、僕はマイ箸とマイタンブラーを持ち歩く生活を始めました。皆さんもできることから始めてみませんか？

2006 春の黄土高原ワーキングツアーのお知らせ

大同の春は GEN のワーキングツアーから。来春も、霊丘自然植物園など大同市南部をまわります。村の人たち、子どもたちとの植樹・交流やホームステイなど、GEN のワーキングツアーならではの体験を満喫してください。

- 日程：2006年3月25日(土)～4月1日(土) 7泊8日
- 費用：一般＝175,000円、学生＝165,000円(国際航空運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、空港使用料、GEN年会費を含む。個人行動時の費用、旅券取得費用は含まな

い。変更になる場合があります) ※中国国際航空利用 ※ 関西空港発着 ※成田利用希望の方はご相談ください。

- 訪問先：中国山西省大同市(北京経由)
- 定員：30名
- 申込み締切：2月15日(ただし、定員に達し次第締め切ります)
- 問合せ・申込み：GEN事務所までご連絡ください。応募書類を郵送します。

草の根交流でギャップを埋めよう

黄土高原ワーキングセミナー参加報告

清水 信孝 (サントリー労働組合書記長)



した。多くの日本人は過去の侵略の歴史についてはしっかり認識しているし、申し訳ないと思っています。でも、中国の人は日本人は反省が足りないと言う。このギャップがとてつもなく気になります。だけど、やっぱり過去の「やられた」歴史ってとても重いものなんだと思います。そんな歴史をしっかり知るのももちろんのこと、こういう植林活動を通じて少しでも草の根レベルでこのギャップを埋めていくことが大事なこ

8/27～31までの4日間、サントリー労働組合としては7回目のツアーワーキングセミナーを、8人という小規模ながら、実施させていただきました。私はGENの世話人を務めながら、まだ一度も黄土高原には行ったことがなく、今回が初めての参加となりました。

そんな私の感想を一言で言えば、「いろんなことを考えさせられ、感じさせられたツアー」でしょうか。

まず、大同にバスで着いたときに一番感じたのは、日本では考えられないような人のパワーを感じる町、ということです。大量の車が我先にと車線も気にせずビュンビュン飛ばしているし、ひかれそうになりながら平然と道を横断している多数の人々、あふれんばかりの自転車……。何かここに居る人たちの底知れぬパワーを感じました。

次に、農村では、小学校で遊んだり、一緒に植林作業をした子どもたち、ホームステイ先で筆談した子どもたちの純粋な笑顔に何かほっとすると同時に、自分が何か大事なものをなくしてしまっているような気がしました。お金がなく、水がなく、食事すらまともにできない農村の子どもたちがなんと楽しそうにしていることか。それに引き換え、日ごろの僕は衣食住にまったく困らないのに、なんかつまらなそうに生きてるな、と。人の幸せって結局何なんですかね。う～ん、難しい。

最後にやはり、日本と中国との関係についてはいろいろと考えさせられま

となんだらうな、と思いました。

ところでサントリーのワーキングセミナーと言えば、さぞかし「カンペイ」をしまくったのでは、と思っておられるかもしれません。しかし今年は残念ながら参加者が少なかったうえ、半数が大同でおなかをこわしてしまい、過去の先輩方の記録には遠く及びませんでした。しかし、8人のうちの1人が現地の方から「白酒姑娘(パイチュウクニヤン)」という名誉あるあだ名をつけられるほど現地の方に上手にお酒をすすめ、最終的には恐れられていたことは報告させていただきます。

ツアー全体を通してお世話になったみなさん、ありがとうございました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

植物屋のこぼれ話 (続編) その6

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

中国北部の砂漠の樹木

●乾燥地の樹木

古い話で恐縮であるが、1970年頃に乾燥地の樹木を集めようと世界中の植物園にコンタクトしたことがあった。いろいろと資料は集まったが、実物のコレクション旅行はなかなか実行できなかった。そのとき得た資料のなかに中国からのすばらしい出版物があった。それは中国の21か所の国立植物園の



胡楊 (Populus euphratica)

カラー図版で英文解説のもので、当時立ち遅れていた中国ではめずらしくきれいなカラー図版であった。そのなかに砂漠の植物園である「民動砂生植物園」の解説があり、何枚かのカラー写真のなかに胡楊と梭梭の2種の樹木があった。この植物園は新疆自治区の砂漠のど真ん中にある。この2種の樹木の写実はいたく私の頭に焼き付いていた。山西省の黄土高原の緑化の仕事をはじめたときからこの植物の入手を心がけていたが新疆まででかける余裕はなかった。その2種のうちの胡楊が大同にある、と高見さんに聞いていたが今回それを見ることができた。

●胡楊と梭梭 (Populus euphratica & Haloxylon ammodendron)



梭梭 (Haloxylon ammodendron)

胡楊は砂漠のポプラであり、ヤナギに近縁の植物である。この仲間は河川や湖沼のそばに生える植物なので、よほどの変わり者といえる。葉はやや小さく、異形葉でいろいろな形の葉をもっている。

梭梭はアカザ科の植物であることにまず驚かされる。なぜならアカザ科といえばホウレンソウやビート、サトウダイコン、雑草のアカザなど、すべてが草だからである。木になるアカザなんて想像外のことである。小高木で葉

は細くモクマオウのそれに似ている。砂漠独特の砂嵐にもよく耐えられそうな形態である。

●大同の胡楊

2005年9月25日、山西省大同県許堡郷九梁窪林場でそれを見ることができた。かなり大きい成木が7本、周囲に天然実生と思われる若木が数本生えていた。驚いたことは、そこが乾燥地ではなく湿地帯だったことだ。なぜこんな反対の環境に植えたのか、理解に苦しんだが、そばの半分くずれた土堀

のてっぺんに実生が生えてかなり元気に伸びており、砂漠の樹木らしい本領の一端が見られた。昨年この種子を大同の環境林センターで蒔き、小さな実生が育っていた。高見さんはこの小さな実生が越冬できるのか気にしていたので、ビニールハウス内で越冬させてみたらと提案しておいた。また、親木を早く大きくするために他の種類に接ぎ木を試みるようにも指示しておいた。早く大量の苗木が育って塩害地の緑化ができれば、と期待しながら帰国した。

黄土高原史話〈27〉

何が幸いするのやら

谷口 義介 (摂南大学教授)

このシリーズ、「黄土高原史話」と題しながら、日本の国土の1.5倍、51万7000平方キロの全体は到底カバーできず、GENの主たる活動領域、大同とその周辺をウロウロ迷走するばかり。本誌の性格上、〈環境〉を切り口にしていきますが、それとて不徹底。

ご高承どおりの駄文ながら、自分で思うに唯一筆が走ったのは、本誌100号の記念として少し長めの紙幅が許された、第22回「天下分け目の白登山」。なにせ、かの司馬遼も望んで果せなかった現地踏査の強みあり。もとより、血湧き肉躍るていの話は大好き。思わず知らず筆も躍ったという次第。その余勢は、前回の「よもや墓碑などあるまいが」にまで。

そこでしつこく今回も。ただし主役は秦末劉項期の群雄に非ず、前漢に入ってから二人の女性。名を薄姫と竇姫という。

漢王元年(B.C.206)、戦国魏の王族の出の魏豹なる者、立って魏王となりますが、漢は「国士無双」と謳われた韓信(韓王信とは別人、股くぐりと背水の陣で有名)を遣って、これを撃滅。稀代のスキモノ劉邦は、魏の宮中にいた薄姫に目をつけて後宮に入れますが、他に美女は数多あり、1年ばかり手をつけず。ところでその昔、彼女は魏の後宮で管夫人・趙子兒と友達同士。「誰

かが貴い身分になっても、お互い忘れないようにしましょうね」と誓い合っていました。先に劉邦の寵愛を得ていたこの2人、薄姫との約束を思い出し、笑い話にしたところ、それを聞いた劉邦、そぞろ憐れをもよおして、一夜薄姫を幸します。かくして生まれたのが、四男の劉恒。

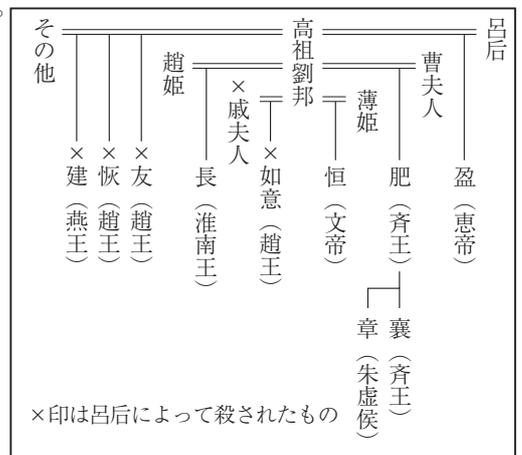
漢の12年(B.C.195)、高祖劉邦は、恒を立てて代王とし、晋陽(山西省太原の南)に都させました。一説に中都(山西省平遥の西北)とありますが、いずれにしてもすぐ近く。前回述べたように、周勃が太原から入って代を平定した後を承けてのこと。ただこの代国、雲中・雁門・代3郡のうち代・雁門のみを領し、都も常山(恒山)より南に定めているのは、やや引いた感じ。「常山の北では遠すぎる」という高祖の意思から出たというのだが。同年、一代の英傑高祖劉邦崩御。後宮の姫妾たちは、皇后呂後のジェラシー(?)により、みな幽閉されますが、薄姫のみ高祖の寵愛うすきが幸いし、8歳の劉恒とともに代国へ。

竇姫はもともと呂後の侍女。人員整理の方針で、各地の王に5人ずつ宮女を下賜することとなり、彼女もその対象に。「実家が近い趙国へ」と、係りの宦官に頼んだ

ものの、この宦官ウツカリ忘れて、代国行きのメンバーに加えます。呂後の裁可も下ってしまい、否も応もありません。泣く泣く代へ行きました。ところが代王劉恒は、長安からやってきた払い下げの5人のうち、彼女だけを寵愛し、男の子まで儲けます。

B.C.180年、権勢をふるった呂氏一族の誅滅後、大臣たちが協議して新皇帝に選んだのが、代王の劉恒。このとき24歳です。仁孝寛厚の評判高く、母の生家薄氏の人々も性いたって勤良、というのが選出の理由。使者が代に向かい、劉恒は長安の未央宮で位に即く。この人こそ、前漢中興の名君と称される文帝です。

つまり、前半生の不幸から一転、薄姫は文帝の母となり、竇姫は文帝の皇后として次の景帝を産むなど、「貴い身分」を極めたわけ。竇姫の元同僚はともかくも、薄姫の方の老朋友、さぞかし臍を噛んだことでしょう。



高祖の諸王子とその母

情報ひろば
いそなかつち

第14回 OECC 海外環境協力セミナー
中国第11次5か年計画 (2006~2010)
における中国環境政策の動向
(新たなビジネスチャンスの可能性を探る)

- 日時：11月24日(木) 13時~17時
- 場所：虎ノ門パストラル新館5F「ミモザ」(〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-1 Tel.03-3432-7261 (代))
- 内容：講演「第11次5か年計画における中国環境政策の動向及び日中友好環境保全センターの今後の発展」陳燕平氏(中国国家環境保護総局日中友好環境保全センター主任)、「環境問題の百貨店(デパート)中国とのつきあい方」小柳秀明氏(日中友好環境保全センター日本専任組長)ほか
- 受講費：無料
- 募集人数：100人(先着順)
- 主催・問合せ先：社団法人海外環境協力センター研修部会(〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-8 芝公園アネックスビル7F (社)海外環境協力センター OECC セミナー事務局：吉椿、堀内(Tel. 03-5472-0144 Fax. 03-5472-0145 E-mail: ykaoru@oecc.or.jp)

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

- 共催：中国国家環境保護総局日中友好環境保全センター
- 申込方法：氏名、会社・団体名、部署・役職、住所、電話、FAX、E-mailをご記入の上、11月18日までにFAXまたはメールで上記セミナー事務局まで(申込締切を過ぎた場合には直接お電話でお問合せください)。

第31回日中交流セミナー
最近の日中関係をめぐって

「政冷経熱」あるいは「ギクシャク」といわれる最近の日中関係は何に起因するのでしょうか。「反日」「嫌中」言動の顕現化と、その意識の底流にあるものを追及し、未来に向かって日中関係はどうあるべきかを考えます。

- 日時：11月26日(土) 14時~16時30分
- 場所：大阪市立弁天町市民学習センター講堂(JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ、ORC2番街7F)
- 講師：竹内実さん(京都大学名誉教授)
- 参加費：1,000円
- 主催・問合せ・申込み：関西日中交流懇談会(TEL./FAX. 0797-88-2240 e-mail: kansainc@hotmail.com)

甲浦ポンカンをどうぞ

有機肥料のみ、農薬をできるだけひかえた田中さんの柑橘類は、年末年始の贈り物にもおすすめです。

- ポンカン(低農薬・有機栽培)

A	3L/2L	5kg	化粧箱	4,000円
B	〃	〃	普通箱	3,700円
C	〃	3kg	化粧箱	2,600円
D	L	5kg	化粧箱	3,500円
E	〃	〃	普通箱	3,200円

- 出荷：2006年2月まで
- ★送料別途。関西630円、関東840円(20kgまで)。
- ★お申し込みは田中隆一さんまで。
〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦
TEL/FAX. 0887-29-2500
- ※売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GENの紹介」と一言添えてください。

編集後記

「あの人この人」に小西さんが書いてくださった追悼記念碑の「彰往察来」の文字は、実はGENの副代表有元幹明さんが揮毫したものです。日中両国の人に通じるふさわしい言葉をと、ずいぶん頭をひねっておられました。(東川)